# 自然災害と仏教者の活動 ―東日本大震災をめぐって―

### 大西克明

## - はじめに

そして現在でも、約十四万四千人が避難生活を強いらによれば、死者数は一万五八九四、行方不明者数時間のうちに迫ってきた巨大津波によって数多くの人時間のうちに迫ってきた巨大津波によって数多くの人時間のうちに迫ってきた巨大津波によって数多くの人時間のうちに迫ってきた巨大津波によって数多くの人時間のうちに迫ってきた巨大津波によって数多くの人時間のうちに迫ってきた巨大津波によって数多くの人時間の方法を表表して現在でも、約十四万四千人が避難生活を強いらる、反して現在でも、約十四万四千人が避難生活を強いら

れている。

染により、これまでに延べ約十五万人が避難を余儀なの事故は、被害をさらに深刻にした。放射能物質の汚津波による災害に加えて、福島・第一原子力発電所

くされ、その不安と苦難は今でも続く。

は、経済中心的で合理的な人間観・社会観への強烈なた日本社会に特別な意味を与えたと考えられる。それ震災と原発事故は、近代化と高度経済成長を成し遂げ教にどのような影響を与えたのであろうか。東日本大教にどのような影響を与えたのであろうか。東日本大

やすさをみつめ直すきっかけを与えたのである。これ 反省と共に、これまで培ってきた世界観の虚しさであ の芽生えをもたらす経験であったはずだ。 人間を超えたものの n 同時に、 力への気づきや、 人 間 の無力さ、 弱さ、 新しい 傷 世 つき

に、 悩 想像を絶する甚大な被害、 0 の不信感も日本の人心に深く根付いてしまった。 ることは誰 く促された背景がある 際に、 の数々。 この度の災害 宗教者や宗教団体が、 宗教者や宗教団体は大きな貢献をしてきた。 これらの事象に、 0) 目にも明らかであった。さらに、 (自然災害のみならず関連する人災を含む 数多の死者、 行政の枠を超えて活動する 行政の対応には限界があ 言い 知 行政へ n D

Щ 九 行 九 噴火など、 H 方不明 五年一月十七日の 本列島は災害列島である。 者が六四三七を数えた。 他 の諸国と比して自然災害は |阪神・ 地震 淡路大震災」では、 この震災では、 台 風 数 洪 水 数 死 火

Volunteer first year」と言われる年となった。

宗教者

多くのボランティア団体が活動し、「ボランティア元年

さぐりの状態であったといえるだろう。 や宗教団体も支援活動を行ったが、この段階では、 丰

され、 引きが融解していったとも考えられる。 めて認識され、 ボランティア活動が、 だが、二〇一一年の災害では、それらの経 より本格的な支援活動につながった。 両者 (ボランティア活動と宗教活動) 宗教者の本来の活動であると改 験が

した。 教者・ 震災発生直 宗教団 体はさまざまな救援・ 後から、 伝統宗教・新宗教を問 支援活動を展 わ ず、 開 宗

例えば、(一) 緊急避難の際の宗教施設 0) 使用

長期的な避難の拠点提供

(三) 炊き出

し支援

<u>四</u>

瓦礫撤去活動 <u>E</u> 行方不明者の探索活動 (六) 救

難・支援物資の提供

七

災害遺児への支援

除染活動 (十一) 心のケア 九 募金活動 傾聴活動、 + 死者供養や追悼儀礼 などが今日まで

教団体がかかわっている。 のみならず、 の主だった活動といえる。 災害後の精神的ケアに多くの宗教 この点が、 そして、 災害時 今回の宗教支援 Ó 救 者 援 活動

の特徴でもある。

てみたい。 の動きに焦点を当て、それを報告すると同時に、公共の動きに焦点を当て、それを報告すると同時に、公共の動きに焦点を当て、それを報告すると同時に、公共

## 2 現代日本における仏教の社会的位置

して論じていく。教を主題とするため、以下、仏教者・仏教団体に限定支援活動の社会的背景を考察したい。なお、本稿は仏支援活動の社会的背景を考察したい。なお、本稿は仏まずは、現代日本における宗教者・宗教団体の災害

基礎的な絆のありかとなっている。

て、人々の儀礼的紐帯の象徴となってきた。 家(一族)の祖先祭祀や、地域の共同体儀礼を媒介としいを寄せてきたといっても言い過ぎではなかろう。一心を寄せてきたといっても言い過ぎではなかろう。一心を寄せてきたといっても言い過ぎではなかろう。一いを寄せてきたといっても言い過ぎではなかろう。一いを寄せてきたといっても言い過ぎではなかろうに関心はあったにせよ、国家社会全体の秩序のあり方に関心はあったにせよ、国家社会となってきた。

関心事であった。

第二次世界大戦後、

日本は経済成長の代償として、

展した。今では、仏教系新宗教が誕生する以前からの個への救済を主として説く、戦後の仏教系新宗教が発都)。その社会的過程で、準拠集団を失った人々に対し、

は衰退傾向にあるとはいえ、農漁村では未だに人々のの名望家として一定の役割を果たしている。この役割じて親族組織や地域社会に根付き、有力な寺院は地域じて親族組織や地域社会に根付き、有力な寺院は地域は、檀家との繋がりを大切にし、葬祭を通仏教を、日本では「伝統仏教」と呼んでいる。

伝統仏教と異なり、個人に焦点を当てた教導が主要なは、在家信徒達の「なかま(同信的紐帯)」が重要視され、家郷を失った都市の人々に受容されていった。そこで教系新宗教は、この世での人間変革の実現を掲げて、

世俗的知識が教授され、若者は成人に至るまで宗教にめつつあった。高等教育が普及し、学校では主としてまた、日本社会はこの時期、急速な「世俗化」を進

イエや村落の解体を経験した(全般的な都市化や離村向

社 ものであったといえよう。  $\mathbf{H}$ W 触 1会貢 った。 本のド n る機 献 活 会が著しく低下した。このため、 ミナントな価値 動は世俗の 仏教系新宗教の隆盛はあったものの、 知識を基盤としたものとなって は 世俗的 知識を媒介とした 社会参加 B

く \_ 社会へ チュ 下鉄サリン事件)。 向 たことは記憶に新し は特に高学歴層に強く現れた。それらの中か 部の アルな文化への関心事として現れてきた。 九七〇年代以降の低 0) 集団が終末的 部の不満が、 V) な思想を媒介に殺人集団と化し (一九九五年三月のオウム真理教 精神世界への探求や、 成長時代に突入すると、 この スピ 5 世 1) 俗 批

ments) 俗 は 1 がそれを支えていたのである。 的 確 このように、 知識 か な 価 である。 が生起したにもかかわらず、依然としてドミナ と結び 値は 世 この 0 俗的知識を中心としたものであっ į, た行政 ために、 的 公共空間での言説は、 知識であり、 (new spirituality move 科学 への た 信 世

このような体制は、

第二次世界大戦後の政教分離

制

精神世界へ への探求 阪 か

宗教的 おける宗教性を限りなく排除しようとするものであ 度と親和性を持つものであった。 分離 価 制 値は後者の 度は、 公共空間 私的空間に封じ込め、 と私的空間 この戦後日 を厳密に分けて、 公共空間に 本的な政

教

たと思われる。

したがって、

宗教団:

体が公共空間へ

参与することが

仏教団体の社会貢献活動を積極的に報道することは 私的空間での行動として認識され、 動や社会貢献活動は、 禁忌される視座が形成された。また、 力は結果として抑制されてきた。 として支持されてきた。その結果、 成長に成功したこともあり、 メディアは、 ったのである 公共空間を担うものとしての自負からか、 実施されてきたにもかかわらず、 その体制 事実、 仏教! 公共空間での影響 日本社会が経済 は 日本のマス 団体の平和活 善きも 0)

がら災害支援活動を積極的に行っ 教系新宗教を問 神 このような風潮に一 淡路大震災であった。そこでは わず、 多くの宗教団 石を投じたのが、 た。 体 が 被害の大きさか 社 行 伝 統 九 仏 九 五年 誤 しな 仏 o)

宗教団体

積極

ら、

た瞬間であった。 一九九〇年代後半以降、 日本政府は、「小さ

11

仏教者がNPO団体を立ち上げる機運にもなった。こ 政治的な新自由主義の傾向である。 なったのである。 政府 Limited government」志向を強めつつあった。 その結果、仏教者がNPO団体に参画し、さらには、 民間ボランティアの支援を積極的に求めるように 一九九八年にはNPO法も施行され 行政的な福祉領域

今回 寸 のような社会背景を念頭に考察する必要があ 東日本大震災と仏教団体の支援活動との関係は、 の自然災害 0) 公共空間における役割に再考を迫るもので (ないしはそれと関連する人災)は、 る。 以

上

成していった。

前提にしつつも、

公共空間に参与する一つの回路を形

のような社会的背景は、

仏教団体が、

政教分離制度を

東日本大震災は、 多くの日本国民が感じてい 従来の価値観に反省を加えるもの る。 私が思うところ

以下二点にまとめてみよう。

信も重なった。従来型のシステムは再考しなければな を怠っていた事実が明らかになり、 である。さらに、東京電力は、 到来する危険性は一部の科学者が指摘していたにもか らないという機運は、 る程度知っていたにもかかわらず、 た。そのため十分な津波対策は後回しにされてきたの かわらず、その声は机上の空論だとして退けられてき つながった。さらに、 まず、①行政と科学への不信感である。 ②宗教的価値の再考である。多くの 強いものとなっている。 放射能汚染への行政対応 巨大津波の 八年 大きな不信感へと 判断 巨大津 危険性をあ 日本国民 から対策 の不 上波が

しかし、「なぜ大災害が起こってしまったのか」「な

ずしも考えているわけではない。

は、

今回

の震災で

「宗教復興」がなされるべきだと必

208

ぜ、 災害支援活動を、 解決しないと感取している。 0 0) ている事実は、その証左といえるかもしれない。 ような苦しみに遭遇するのか」、  $\mathbb{H}$ が釈は、 本国 他ならぬ私の家族が犠牲になったのか」「なぜこの 民 世 が漠然と感じ、 俗 的知識から導き出せないことを、 多くの日本国民が好意的に受け 行政的知識や科学知では、 少なくとも、 このような苦悶の意味 宗教団 体 止 め 0

た事実もある。 悩を共有し、 安を煽り、 な支援のみならず、 もちろん、ごく一部 強引な布教活動を行い、 共に死者を悼む祈りを捧げたのである。 だが、 生き残った被災者に寄り添って苦 ほとんどの宗教団体は、 の宗教団体が、 世 間 災害に乗じて不 の非難を浴び 物質的

して、 公共空間 うな宗教団体の活動は、 生じつつある、 団とみなされがちであった宗教団体への 私的空間に囲 疑義となって現れているともいえる。 低いものとなってきているのは事実である。 への宗教的価値の参画への敷居が、従来と比 というのは過言ではなかろう。 い込まれたがゆえに、 従来型の公的・私的の二分法 自己利益追求集 認識の再考が 少なくとも この

## 仏教団体の震災支援

4

#### 伝統仏教の 事例

院は、 実施した。以下、 て、様々な物質的支援を行った。 ると、生き残った被災者たちへ、 てきたのかについて紹介したい。 では、 る。 イエや 被災を免れた各寺院は、 具体的 地 域 に仏教団 四つの活動を紹介したい 共同 体 の紐帯として未だに 体はどのような震災支援をし 行政やNPOと協働し 特徴ある支援活 その後、 伝統仏教の多くの寺 復 興期に入 能 して 動

Ŋ

域では年中行儀として様々な祭りが行われている。 わ 聞報道では、 ではそれらの祭りは実施不可能な状態に陥った。 あることで人々がつながる。 ミュニティー の祭礼に寺院も深く関与してきた。 まず、 れるのは、 寺院は祭礼を復興させることで、 ①伝統行事による地域の復興である。 「たとえ震災で地域が失わ みんなが祈りや願い 再生と絆の再確認を試みようとした。 震災があってもそれ や救いを伝統芸能に 被災を受けた地域 避難民たちのコ れ れても、 芸能 伝 そこ が 統 新 そ 地

求めているからなんです」との語りが掲載された。 (3)

②読経ボランティアである。この言葉は、

災直後からしばらくの間、被災地の現場を報道する記に加え、建物の崩壊等により犠牲者の葬儀が十分に実に加え、建物の崩壊等により犠牲者の葬儀が十分に実施できない事態が発生した。そこで、僧侶が宗派を超えて、遺体が運び込まれた場所で、死者のために読経し、「手を合わせてくれるだけでもありがたい」「お経し、「手を合わせてくれるだけでもありがたい」「お経し、「手を合わせてくれるだけでもありがたい」「お経め、「手を合わせてくれるだけでもありがたい」「お経め、「手を合わせてくれるだけでもありがたい」との参列者からのをあげてもらうだけでありがたい」との参列者からのをあげてもらうだけでありがたい」との参列者からのだった。これらも宗派を超えた活動として注目さたしていた。これらも宗派を超えた活動として注目されて。

た取り組みであった。 (8) が企画し、その収益を仮設住宅の運営費に回すといっが企画し、その収益を仮設住宅の運営費に回すといっまた、③チャリティーイベントが開催された。寺院

でもっとも寺院数が多い宗派は曹洞宗である。曹洞宗そして、④傾聴ボランティアが行われた。被災地域

は、 ことを目的としている。このような傾聴ボランティア る一時を提供し、お互いが、同じ命を生きる仲間とし 不自由な生活を余儀なくされている被災者へ、心休ま たのである。災害によって、心理的ストレスを抱え、 茶を飲みながら被災者の話に耳を傾ける活動)として展開し ものである。今回、この行茶を、 的な気づきや、本来の自己への回帰が期待されている 自身の修行を客観的に見つめ直すこと、さらには宗教 状態でお茶を頂きながら、日々の自分自身の在 には、「行茶」と呼ばれる儀式がある。これは、静謐な(9) 者が自分自身と自らの日常を徐々に取り戻してもらう て通じ合う心を確かめるのである。そのことで、被災 一定のメンタル・ケアとなり、 傾聴ボランティア(お 被災者に受け入れ り方や

## 創価学会の事例

られていった。

の事例を紹介しよう。 (回) の事例を紹介しよう。

震災発生直後、

直ちに災害対策本部を立ち上げた創

ると、 には、 十二 活用されたのである。 市 0 けられた。 消防隊の活動拠点としても利用された。 には約千人の被災者が避難した。 被災地 約 間後には、 被災を免 五千人の被災者を受け入れ にある最大の施設である東北文化会館 新宗教教団 n た地 緊急支援物資が届けら また、 域 の機動 から 創価学会の施設は宮城 力のあるネット おにぎり た。 他 が の施設も合わ れ、 震災発生 Ŧī. 五〇〇個 被災翌 ヮヿ か ク 仙 県 湢 が H

価学会は、

被害状況の把握と支援ニー

・ズの

把握を行

門

在 らに、 動を展開 統仏教の僧侶中心の活動とは異なるところである 員 家信 また、 災害支援をする会員が多く見られた。 手 信 避 は 者 0 徒 難 届 の 地域ごとのネット 所 創価学会は、 が主体的に活動する新宗教の特徴であり、 自らが被災者であるにもかかわらず、 みならず、 か な 延べ約二万人の人的支援が行わ の救援物資 V 場 所 住民の所在や消息を把握 に救 全国的なネットワークを活 援 ワークを活かし 0) 供給、 の手を伸ば 救援ボランティア活 この ていっ 地 n 側 主 た。 域 面 かし 体 行 0) は そ 伝 的 さ 슾 政

> 語りえない側面 ア等が 護士、 師とい みを共有 多くの 不条理な苦難に遭ってしまうのか。 的 同 前向きに生きる糧をえることになる。 職 時 に 死傷者が出 展開されたのである。 公認会計士、 業の会員信者が った会員信者による健康 創 共に苦しむことで、 価学会の独自の支援として、 もある。 た。 税理士による法律相 家族を失った者も多い。 支援に駆 だが、 当然、 会員信者 相 け 心理的 談ボ つけ その解釈は多様で、 会員信者の中にも ランティア、 た 負 同 談 担 ボボ 全 医 士 ・ラン が、 玉 が 師 か 軽 や なぜ、 苦し ŝ 看 弁

の付与に比して重要な震災復興支援として機能 たように思われる 同 苦する感情の絆の存在が、 震災の形 而 上 学 して 的 解釈

れ、

#### 5 震災の 解釈

とだ。二〇 世はテレビの 震災が、 「罪」の このような神義論を誘発させるの 年四 般視聴者からの質問に答えて次の ない者が苦しまなけ 月 口 1 マ教皇ベ ればならない ネディクト十六 は 自 0)

教皇は答えた。「答えはないかもしれませんが、大切な ちが、こんなに悲しまなければならないのですか?」。 に答えた。日本のある少女は質問した。「なぜ子どもた(ユ) のは神があなた方のそばにいるということです」

入しない、③神は介入する、というものである。 ①神は全能ではなかった、②神は全能だが、あえて介 リエーションがあるという。それは大きく分けて、 その中でも、ユダヤ・キリスト教においては様々なヴァ 元論、 神義論のみならず、 神義論 インド思想に典型的な因果応報思想などがある。 (苦難の神義論) には、ユダヤ・キリスト教の ゾロアスター教に典型的な善悪二

すること自体を禁忌しているようにも思われる。 キリスト教に典型) 教条的な議論の応酬は一般的でない。すなわち、 めるにすぎない。 神観念や業の論理で、 だが、日本のキリスト教徒は人口の約二・五%を占 神議論をテーマとした日常的議論や、 の神議論への馴染みは薄い。日本社 大多数の日本国民は、この種(ユダヤ・ 自然災害を形而上学的に説明 はたまた 全能

震災直後、

日本の首都・東京の都知事であった石原

れない。 神議論を意図的に拒否する文化的背景があるのかもし 的態度を示しているように思われる。言い換えれば、 らかの「罰」であるとする解釈に対し、 こからわかるように、 さが非難され、 ないと、個人的見解を披露したのである。しかし、 に、 慎太郎は、震災を「天罰」だと言い放った。これを機 の発言は、 日本人は我欲を排し、生き方を改めなければなら 生き残った被災者や、死者の前で、 被災者に対する侮辱とも解釈される不適切 彼は発言の翌日に撤回し謝罪した。こ 日本国民の多くは、 無意識に拒否 震災がなん 震災の 神

今回の震災に対し、多くの仏教者や仏教団体は神議

ろうか。

議論をすること自体を自重し、

慎んでいるのではなか

前で、 本国民の特有の思惟なのであろうか。 あるのであろうか。数多の自然災害を経験してきた日 ない。無常と苦渋を耐え忍ぶ「構え」が心の核として あるとし、「神」の介入などといった議論を積極的にし 論を積極的に展開はしなかった。少なくとも被災者の それを行うことはなかった。震災は自然現象で しかし、 にもか

かわらず、災害によってもたらされた死に対する意味 拒否しているわけでもなさそうである。

意味がないのならば、覚悟を決めて現実を受け入れて らず、この度の震災は、 祈るよりも科学を信頼したのである。それにもかかわ 在への信憑性は揺らぐこととなった。人々は、 えも裏切られた被災者たちは、どこに向かえばよい ている。 しかし、近代化・世俗化が進展することで、 ジととらえ、カミの怒りを鎮めるために供物を捧げた。 近代化以前の日本社会は、自然災害をカミのメッセー 解決策が導き出せないことに、いくら失望しても カミの実在への信憑性なき時代に、 あまりにも悲惨で苦悩に満ち カミの実 科学にさ カミに

て ! [3]

す」「生命は永遠であり、

います」「断じて負けるな!

かなる苦難も、

永遠に幸福になるための試練でありま

生死を超えて題目で結ば 勇気を持て!

希望を持

だけは絶対に壊されません。

送った。「『心の財』

ショナル)会長が以下のようなメッセージを被災者に

して、 議 実際は、このようなものだったと思われる かった。 論 本の仏教者・仏教団体は、 や業の 共に前へ ただ、 論理を積極的 進もうとした。 寄り添い、 共感し、共に悲しんだ。そ 直接的に説くことは 震災後の精神的支援 被災者に向かって、 しな 神 0

> 要は、 ここには、 である」(現代語訳)との遺文を用いて、苦しみ喘ぐ人々 切衆生のさまざまな苦悩は、ことごとく日蓮一人の苦 寄り添いの精神が見て取れる。 が語られていない。 に同苦し、人々が苦難から立ち上がるまで励まし続け いて生きていくのだという精神的サポートであった。 ることを重視したと考えられる ここでは、 今回の震災で、仏教者・仏教団体が行 精神的に同苦し、 宗派間の大きな差異はみられない 自然災害を契機とした「苦難 共感し、同苦するという、 共に死者を悼み、 創価学会は、日蓮の「一 った活動 共に前を向 0 神 傾聴と 議論 0) 主

ワーダ仏教のアルボムッレ・スマナサーラ(Alubomulle

最後に、日本において一定の読者層を得ている、

例えば創価学会では、

池田SGI(創価学会インタナ

ダ仏教協会において、初期仏教の伝道と瞑想指導を展Sumanasara)の見解を紹介したい。彼は日本テーラワー

開する人物である。

なお、 のせいでもない自然現象であると捉える。 の拠出などを積極的に行っている。 を展開し、智者としていかに生きるかを説いている。 き出しやイベント支援、 て「苦」を感じるかどうかという、主体の側の業因論 論によって把握はしない。むしろ、 き方をするのか、どちらかであるという。 れを苦と感じ精神的に落ち込むのか、冷静に智者の 、精舎)を避難所として開放し、また、被災地域での炊 彼は、 日本テーラワーダ仏教協会は、震災直後に道場 震災が「天罰」であるとの考えを否定し、 図書館への図書支援、 現象(震災)に対し 震災を業因 問題は、 義捐 そ 誰 金 生

綜合的に判断しなければならないだろう。 代社会の合理 義の台頭) 類型化自体の再考察や、 災の解釈については、 や 社会構造の特異性などを考慮に入れつつ、 化 0 進展 (その反作用としての新しい伝統主 日本の精神的文化的背景、 従来の 「苦難の神義論」 しかし、 本 現 0)

自体が概念化される前の、宗教的感情に対応したもの支援(寄り添い、共に苦しむ)は、「苦難の神義論」それ

稿でみたように、仏教者・仏教団体の復興への精神的

だった、ということがわかる。

する潮目に来ているのかもしれない。 する潮目に来ているのかもしれない。 する潮目に来ているのかもしれない。 する潮目に来ているのかもしれない。 する潮目に来ているのかもしれない。 する潮目に来ているのかもしれない。 する潮目に来ているのかもしれない。 する潮目に来ているのかもしれない。

注

(1)「仏教系新宗教」は、幕末期(安政四年)に創設され(1)「仏教系新宗教が、「伝統仏教」と比して個別主義的であった新宗教が、「伝統仏教」と比して個別主義的であった新宗教が、「伝統仏教」と比して個別主義的である。仏教系新宗教」は、幕末期(安政四年)に創設され

- 上昇した(文部科学省『学校基本調査』年次統計より)。 大学進学率も同様に、約一〇%から約三七%にたが、二十年後の一九八〇年には約九四%に上昇して(2) 高校進学率は一九六〇年には約五八%(男女計)であっ
- (1)也成系しの伝統(茶匙)夏里に関しては、公女記(3)『日本経済新聞』二〇一四年三月十五日。
- せ、地域祭礼や伝統・芸能の復興に関しては、仏教界と比して神社神道界の取り組みが際立っている。日本財団は、稲場圭信・黒崎浩行編著『震災復興と宗教』明石は、稲場圭信・黒崎浩行編著『震災復興と宗教』明石書店、二〇一三年を参照。また、復興支援の一環で進められてきた神社神道界の取り組みが際立っている。仏教のみめられてきた神社神道界の取り組みが際立っている。仏教のみは、稲場主は、仏教界と比り、地域祭礼や伝統・芸能の復興に関しては、仏教界と比り、地域祭礼や伝統・芸能の復興に関しては、仏教界と比り、地域祭礼や伝統・芸能の復興に関しては、仏教界と比り、地域祭礼や伝統・芸能の復興に関しては、仏教界と比り、地域祭礼や伝統・芸能の復興に関しては、仏教界と比り、地域祭礼や伝統・芸能の復興に関しては、仏教界と比り、地域祭礼や伝統・芸能の復興に関しては、仏教界と比り、地域祭礼・大会の表演を表演を表演している。
- 一年三月三十一日 ニュースリリース」)。の組織結成を促している(全日本仏教会HP「二○一の組織結成を促している(全日本仏教会HP「二○一域並びに近隣地域の僧侶に対して、読経ボランティア(多日本仏教会は、二○一一年三月二十三日に、被災地

12

日本財団、二〇一三年。

- (6) 『朝日新聞』二〇一一年四月十六日。
- (7) なお、読経ボランティに対し行政は、政教分離の壁」『A九日、並びに「読経ボランティアに政教分離の壁」『A九日、並びに「読経ボランティアに政教分離の壁」『Aたり、なお、読経ボランティに対し行政は、政教分離を理由
- (8) 具体的なチャリティーイベント、募金活動については

- 報告書―』二〇一五年六月。 は教各宗派教団の取り組みに関するアンケート調査―学 藤森雄介研究室編著『東日本大震災における日本会 東日本大震災対応プロジェクト委員会・淑徳大以下の報告書を参照されたい。日本仏教社会福祉学
- 公式サイトを参照。http://www.sotozen-net.or.jp 「行茶活動(行茶ボランティア)」については、曹洞宗
- ○一二年、を参照。 「潮」編集部編『東日本大震災報道から』二げでたまっか! 聖教新聞東日本大震災報道から』二けでたまっか! 聖教新聞編集総局編『負たか』潮出版社、二○一一年。聖教新聞編集総局編『真

10

9

- (11) Transcript of papal Q&A on Italian TV, Apr. 22, 2011. http://ncronline.org/blogs/ncr-today/transcript-papal-qa-italian-tv (二〇一六年十月アクセス)。日本語
- 『聖教新聞』二〇一一年三月十六日。

13

14

四年があり、参照した。また、スマナサーラ自身の見佐藤哲朗『日本「再仏教化」宣言!』サンガ、二〇一の立場性から、震災の解釈を提示しているものとして、テーラワーダ仏教並びにアルボムッレ・スマナサーラ

(二○一六年十月アクセス) 解については、彼の被災者へのメッセージを参照。

(おおにし かつあき/東洋哲学研究所研究員)